

## 第二百二十話 脈々たるDNA

偶々目にした旅順港閉塞作戦から、大東亜戦争終盤に陸海軍が敢行した特別攻撃隊に思いを致し、日本人に崇高な気概が流れていることを感得した。

### 1 日露戦争旅順港閉塞作戦における決死隊員募集

1904 (M37) 年 2 月 18 日、東郷平八郎司令長官は、(第一次) 旅順港閉塞作戦を発令し、決死隊員を全艦隊の兵員から志望者を募ることとした。秋山真之の大本営への報告文書には、「旅順港閉塞のため、艦隊中より決死の者を募りしに、即時に二千名の勇士を得たり。中には、血書を出せし者もあり、その敵愾心大にして士気の旺盛なること、この一事をもって明らかなり」(東郷平八郎と秋山真之 66p)



### 2 大東亜戦争における特攻隊員の選考

特別攻撃隊出撃戦死者は、海軍(航空特攻、海中特攻、海上特攻) 4421 名、陸軍 1417 名である。その選考に関して、『終戦後のアメリカ戦略爆撃調査団の事情聴取で、海軍兵学校卒の現役士官 4 名、学徒出陣の予備士官 2 名が、アメリカ軍ヘラー准将の「特攻は強制であったか、志願であったか?」との質問に対し、兵学校出身の現役士官は「全て志願であった、しかしフィリピンでは戦況によって部隊全部が特攻出撃したこともある。」「内地で募集した際も殆ど全員が熱望し、中には夜中に学生から何度も起こされて自分を第一番にしてみたいと言われたこともある。また一人息子だから対象者から外したら、母親から息子を特攻隊員にしてほしいとの嘆願書が来たこともあった」と答えている。また学徒出陣の予備学生 2 名も「学徒出陣の我々は軍人精神を体得した者とは言えないが、一般人として戦況を痛感し、特攻が最も有効な攻撃法と信じた。我々が身を捧げる事により、日本の必勝を信じ、後輩がよりよい学問を成し得るようにと考えて志願した」と答えている。このやり取りの中で「アメリカの青年には到底理解できない。生還の道を講ずることなく、国家や天皇の為に自殺しようとする考え方は考える事ができない」と言っていたヘラー准将も、最後には「特攻隊の精神力をやや理解できた。君らのいう事は理に適っており、アメリカ人にも理解できると思う」と話している。』(wikipedia から)

### 3 脈々と流れる熱烈たる殉国の魂

洋の東西を問わず、軍人には自己犠牲の精神が要求されているが、自己犠牲の精神が戦争という極限状況下で、斯くまで発揚されたのは日本を措いて他にあるまい。脈々として日本人の底流には自己犠牲を貴しとする高い精神性が流れているとあって良い。

極限・究極の任務が戦局転換に寄与する筈であり、それがとりもなおさず愛する者を救うためであるとの認識は、特攻隊員の万感の思いが綴られた手記を見れば明らかである。愛する者の為に、一身を捧げる、一命を擲つことは即ち自らの生を全うすることに他ならない。

知覧特攻平和祈念館や江田島教育参考館で、彼ら特攻隊員の遺書に接し、自分が犠牲になることで戦争を終わらせ、国を救い、家族を救いたいという精神の崇高さに心を打たれぬ人はいないのではないかと思考する。

このような精神は、日本人に受け継がれ、明治、大正、昭和、平成を経て令和の今日においても脈々として息づいていると信じるものである。

2 項で見た通り、欧米の心ある者も日本人の崇高な精神を理解している。「死ぬことは生きること、永遠の命を得ることだ。」との精神の何と高尚なことか。一朝一夕で涵養されるものではなかろう。長い歴史の中で自然と育まれたのだろう。

(了)